

熊本市立第二高等学校 平成30年度学校評価表

学校教育目標							
本校の三綱領「自主積極・廉恥自尊・礼節協調」の具現化に努め、知・徳・体の調和のとれた全人教育を推進する。また、これまでの教育方針に基づき、教職員が一体となって保護者や地域との連携のもと、県民の期待に応え、活力がみなぎる存在感のある学校づくりをめざす。							
2 本年度の重点目標							
(1) 学力の向上～生徒が楽しみにする授業展開、読解力・論理的思考力の育成、自学力の育成 (2) 個性の伸長～部活動・生徒会活動の活性化 (3) 豊かな心の育成～規則正しい日常生活の励行、礼節指導の徹底、読書活動・学校行事の充実、体験活動・ボランティア活動の充実 (4) 国際感覚の育成～グローバルな人材交流の促進、語学運用能力の育成と機会の増設 (5) 人権意識の高揚～人権教育の徹底・充実、一人一人を大切にした教育の充実 (6) 理数教育の充実～文部科学省指定SSHの全校体制の更なる推進と申請に向けた準備、科学的創造力・独創力・探究心を身につけるための指導法・評価法の研究、本県中核拠点校としての在り方についての研究							
3 自己評価総括表							
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題	
大項目	小項目						
学校経営	特色ある学校づくり	自ら学ぶ態度の育成	「進路指導年間計画」に沿って、各学年で段階的に自ら学ぶ姿勢と自学自習の習慣を定着させ、学力伸張の基礎を固める。	各学年における進路目標を明確化し、計画に基づいて進路学習や個別面談を実施することで継続的かつ個別に生徒の意識に働きかける。宅習時間の目標値を明確に示すとともに学年と教科が密接に連携して「早期学習」の指導に当たる。	B	月ごとに各学年による指導目標を示し、その実現に向けて継続的に取り組むことができた。「早期学習」については、クラス間の差や個人差が見られるところがあるので、今後「ガイドライン」の徹底と意識向上に向けた働きかけが必要である。	
		読書習慣の定着	生徒の朝読書習慣定着率95%以上を目指すし、読書の幅の広がりを図りながら自己変容の質的向上を目指す。	年間を通して「朝読書」を継続し、全職員で取り組む。また、読書週間の取り組みを活性化させ、積極的に読書に取り組む生徒の育成を図る。	B	年2回の朝読書のアンケートから、「朝読書への取り組み」については、取り組んでいる者が、7月の91%から1月は82%と約9%のダウンとなっており、目標値には届かなかった。「読書の幅の広がり」「自己の変容」についても、大きな変化はないが、「自己の変容」で「変わらない」と回答した生徒が1月では若干減少しており、良い傾向だともいえる。	
		SSHの推進	探究活動の質を高めるための連携（外部・校内）を行う。全教科・全領域において二高ICEモデルを浸透させ、生徒の学習の変容を多面的に測る評価研究を充実させる。	普通科学校設定科目GRにおいて大学・企業・行政と連携する。授業開発部・各教科、教務部（シラバス・授業評価）、進路指導部（新しい大学入試の研究）と連携し二高ICEモデルの導入を検討し、実施する。	B	2年生GRにおいて一般財団法人「ツタワルドボク」をはじめ5つの外部機関と連携した。授業開発では授業改善のための見せどころシートの取組（実施率83%、昨年度76%）を行い、二高ICEモデルの導入、IDの活用、ICTの利用の推進ができた。教務部、進路指導部との連携は今後の課題とする。	
	学校生活・学校行事の充実度		二高生らしく、生徒一人一人が主体的かつ積極的な行動ができるよう促す。	時期や施設状況に応じて、できる限り学校行事を実施し、生徒会や委員会活動等として、生徒自らが自発的活動を盛んにすることで、学校生活の充実や改善向上を図る。	A	渡り廊下等の復旧工事があっていにもかかわらず、学校行事では生徒会執行部が関係各所とよく連携して、行事の成功に向けて積極的に活動することができた。	
	開かれた学校づくり	情報の公開・発信	公式サイト及びPTA広報誌（「二高會報」）について内容の更なる充実を図り、生徒・保護者・卒業生、そして県民の方へ積極的な情報発信を行う。	公式サイトへの更新頻度を高め、分かりやすくなりやすいデザインという観点からサイト構成を改善する。PTA広報委員会との連絡を密にし、保護者の目線による本校の良さを的確に伝える内容を目指す。	B	新しいホームページへ移行し、分かりやすくなりやすいデザインを実現することができ、情報へのアクセスが容易に行えるようになった。更なる情報発信の充実に繋げていきたい。PTA広報委員の方々は、学校行事に必ず参加して取材活動を行い会報内容の充実に取り組むことができた。	
		保護者・地域等との連携	学年保護者会等（保護者参加率80%以上）を企画・実施する。学校行事を近隣小中学校や地域に公開していく。二高會報の内容について更なる充実（視覚化等）を図り、地域等へも積極的な情報発信を行う。	PTA総会を除く、年1回の学年保護者会の周知に努め、極力授業を公開する。また、学校行事への参加を増やすため、広報活動を更に推進する。そのため、二高會報の紙面構成を刷新していく。	B	PTA総会の当日の出席率は57.1%とやや低かったが、学年別保護者会は出席率70%～80%と高く、保護者の関心の高さがうかがえた。また、PTA理事、クラス委員の保護者の支援で、強歩会など充実した学校行事を行えた。二高會報については保護者配付のみにとどまっていたので、本校ホームページへ掲載することで地域に伝えていきたい。	
	安全管理の取組	健康教育の推進	検診の受診率100%を目指す。校内安全点検を実施し健康で安全な学校生活を送れるようにする。	救急救命法の研修や性教育講演会・眼科講演会等を通して意識を向上させ、職員の共通理解を図り、授業・学校行事等で安全で健康な学校生活が送れるよう指導する。	A	校内検診の受診率は95%を超えたが、検診後の受診率は約30%であった。昨年度より上がったが、更に個別指導や保護者への働きかけなど取組を考えていきたい。救急救命法は職員・生徒とともにより充実した内容を実施することができ、救命スキルの向上ができた。	
		施設設備の保守・点検	本年度末、管理棟・図書館が完成する。その他の施設・設備についても改善を進め、施設・設備の不備による事故を0とする。	毎月1回の安全点検の実施。老朽化している各施設・設備について、校内予算で改善を図るとともに、県への働きかけによる大規模な改修の実現を目指す。	A	熊本地震の補修工事が終わった箇所も含め毎月安全点検が行えた。安全点検の結果を検討し事務部と連携を図り、校内の安全と営繕に対する対策が多くとれた。新たな施設（新管理棟等）の点検項目の検討が必要である。	
	学力向上	学習習慣	宅習（予習・復習）の習慣化	1学期に各学年の目標時間（1年生180分、2年生200分）の半分に達していない生徒に対し宅習の習慣化を促す。その生徒数について3学期までに2割減を目指す。	1学期の宅習時間調査で目標時間の半分に達していない生徒を把握し、継続的に学年、担任、教科担当者等で声掛けを行う。	B	1学期に目標の半分に達していない生徒に声かけ等を行った。その結果、その生徒たちの約6割は改善された。2年生は学年全体でも宅習の平均が上がっている。課題は、1年生の宅習平均がほぼ横ばいで伸びがなかったことと、継続的な声かけができなかったことである。
		授業力の向上	授業評価の活用	アクティブラーニングの導入やICTの活用等に伴い、授業形態の変化が求められている現状を踏まえ、実態に即した評価を行い、授業改善・学習環境の改善に努め、生徒への学習支援につなげる。	授業評価が一層実態に即したもとなり、教師の授業改善に資するものとなるよう、授業開発部やSSH部と連携し、授業評価項目を見直すとともに、授業改善につながるよう教科に情報を提供する。	B	2つあった評価票を1つに統合し、質問項目については、ICT機器の利用が授業の内容理解に繋がっているかの設問を設け生徒からの授業改善のフィードバックを得られるようにした。1、2学期で対象クラスが異なっていたり、ICT利用のアンケート実施率が低かったことが課題である。授業評価のルールを徹底する必要がある。
		研究授業の実施	「生徒の思考力・判断力・表現力を高めるための、主体的・協働的活動を取り入れた授業」「ICTを有効に活用した授業」という二つのテーマを掲げ、研究授業・公開授業・授業研究会を行う。昨年度の延べ参観者数290人を上回る参観者数を目指す	前期・後期各4週間の「授業研鑽推進月間」を設定し、スーパーティーチャーによる公開授業や授業研究会、各教科の研究授業、合評会を実施する。また、授業研鑽推進月間中は全授業を参観可とし、自教科・他教科それぞれ2回以上参観することを促す。	B	直近のアンケート調査によると、約8割の教科担当者が「主体的・対話的・深い学び」をもたらす授業の実践に取り組んでいる。また、多くの授業で積極的にICTが活用され、生徒たちの学習意欲の向上や、校外の発表会への積極的参加など、その成果についても報告されている。その一方で、「授業研鑽推進月間」中の研究授業・公開授業の実施回数は年度当初の実施計画の約半数にとどまり、年間の延べ授業参観者数も242人と昨年度の約8割と伸び悩んだ。来年度は各教科への働きかけをより強化したい。	
キャリア教育（進路指導）	進路目標の実現	進路実現に繋がるキャリア教育の展開	進路講演会やガイダンスを実施して生徒の進路意識の向上を図る。2年生までにインターンシップの参加率で60%以上、オープンキャンパスの参加率で100%を目標とする。	ガイダンスは、1年生は職業別、2年生は学問系統別に講師を招聘して実施する。GL（総合的な学習の時間）の発展形としてインターンシップやオープンキャンパスにかかる情報発信を積極的に行い、eポートフォリオの導入に向けて、活動の記録方法について研究を進める。	B	外部講師による進路講演会、同窓会の支援を受けての進路ガイダンス、大学の先生を招いての学部・学科説明会等を予定通り実施することができた。オープンキャンパスには1・2年生のほぼ全ての生徒が、インターンシップについては1年生の約半数の生徒が参加したが、インターンシップに限ると受け入れ事業所の数と職種、生徒の希望などで調整が難しいところがあり、参加率の目標値を達成することができなかった。	
		個に応じた進路指導の推進	学年に応じて自己の進路を考える機会を充実させ、生徒の意欲を引き出すことにより、一人一人の進路目標の達成を目指す。	きめ細かな面談を実施し、生徒や保護者の思いを大切にした進路指導を行う。模擬試験や課外については、事前指導や事後分析を定期的に行い、学力層ごとの指導等、より効果的で個に応じた学習指導の実践につなげる。	B	生徒・保護者とのコミュニケーションの重要性を認識し、担任は年間計画に従って面談を実施することができた。模擬試験実施後には、希望者を対象に教科担当者による解説を実施し、事後の学習につなげるための指導を行った。学習習慣の定着に課題を抱える生徒の指導については、年間を通じて継続的に個別指導を行う必要がある。	
		進路情報の発信	進路に関する適切な情報の提供	「進路だより」を年3回、「進路の手引き」を年1回発行するとともに進路指導室（別室）の積極的な活用を促すことで、生徒・保護者の意識の啓発を行う。	B	予定通り発行し、LHRや三者面談等で活用した。「進路の手引き」については、各学年の実態に応じて、入試制度の学習に使用するなど、有効に活用することができた。模擬試験のデータと可否の相関など、更に活用できる部分も多く、年間計画を見ながらより積極的な活用を努めた。	
生徒指導	交通指導の取組	交通指導の強化と交通マナーの向上	交通安全に関する啓発を積極的におこない、事故件数・違反件数の昨年度比の減少につなげる。	単車通学生講習会や街頭指導及びCAIT（サイクルアシストチーム）を中心とする生徒主体の駐輪場での啓発活動を行う。交通安全教室をより充実させる。二重ロック点検も実施する。	B	二重ロック点検は時機をみて実施した。施設率は目標には数%ほど届かなかった。交通安全教室は実践的かつ具体的な内容で実施した。年間で報告のあった事故の件数は昨年度から40%減少した。	
	服装指導の取組	生徒の服装における自己管理能力の向上	服装指導の機会が減るよう、生徒の自覚を促す日常的な声かけを継続する。	平素からの声かけに加えて、年3回の全校一斉の服装指導を実施する。また、式典等での服装の在り方を自覚させる。	B	生徒指導部と学年部が連携して定期的に服装の指導を行った。また、違反生徒については生徒指導部を中心に指導を徹底した。	
	人権・道徳教育の取組	教職員・生徒の人権意識の向上	生徒は、年3回のLHRや日常のあらゆる活動を通して人権意識の向上を図る。教職員は、LHRの事前研修や年1回の校内研修及び校外研修等を通して人権意識の向上を図る。	LHRは推進委員会が立案し、各学年での事前研修を踏まえ、共通理解を図ったうえで実施する。教職員は校内研修以外の各研修会にも積極的に参加し、その研修内容を他の教職員と共有する。	B	各学年のLHRに向けた事前研修で共通理解を得た上でLHRを実施したので、生徒の人権意識をより向上させることができた。職員の校内研修も積極的な参加を得て、職員の人権意識が向上した。校外研修への参加は、学校・学年行事等との兼ね合いで、必要最低限の参加にとどまった。	
人権教育の推進	特別支援教育活動の推進	不登校傾向の生徒をはじめとした生徒への支援活動	適切な対応、早めの対応ができるように、生徒情報の集約を行う。支援計画や指導計画の充実を目指す。	気になる生徒の情報を部会を出し合い、トリアージ的に表にまとめ、職員で共有する。	B	気になる生徒をトリアージ的に緊急度の段階に分けて、教育相談部会で定期的に確認することができた。ただ、授業や部活動で関わる職員以外への情報の共有には至らなかった。	
	命を大切にすることを育む指導	自他の生命を尊重する心の涵養	命を大切にする心を育むために、「健全な自尊心を育む」、「規範意識を育む」、「人間関係を築く力を育む」を目標とする。	授業、ホームルーム活動、特別活動、総合的な学習の時間等すべての教育活動において、三つの目標を明確に位置づけ、道徳的実践活動を効果的に推進していく。	B	人権教育担当者や教育相談部と連携を図りながら、各授業や各ホームルーム活動で道徳の実践活動を行うことができた。職員同士の情報交換や連携の機会をもっと増やすことにより、更に学校全体での取組としていけるように工夫を重ねていきたい。	
	いじめの実態把握	いじめ早期発見の取組及び相談体制の確立	いじめの早期発見・実態把握に努めるとともに、生徒・保護者が相談できる環境作りを行う。	日常的な生徒への声かけ及びカウンセリング指導を重視し、未然防止と早期発見に努める。併せて心のアンケートによる実態把握、LHRでのいじめ防止学習、生徒に思いを書かせる「今ここで」の取組等を行う。	B	心のアンケートや日常的な声かけにより、いじめの実態の把握やスクールカウンセラーとの連携に努めるができた。また、家庭でも実態調査を行ってもらい、保護者にもいじめ等の防止の協力を促した。LHRでの取組も充実しつつある。	
指導体制の整備	いじめに対する措置	いじめが発覚した場合は、組織をあげて速やかに対応し、問題解決にあたる。	いじめが発覚した場合は、いじめ問題対策委員会で速やかに対応する。その際、個人情報の扱いに留意しながら、保護者とも連携し、生徒の安全と安心を最優先にした姿勢で取り組む。	B	いじめ問題対策委員会で、「いじめを受けた」と回答した生徒全員について実態調査を行った。また、いじめの疑いのある事案についても審議した。一部生徒については、三者面談やスクールカウンセラーの助言を受ける等、保護者と職員間との連携を密に行った。		
	コミュニティ・スクールの活性化	学校運営協議会の開催	熊本市東部の防災拠点としての役割が果たせるよう、盲学校・熊本聾学校と協同して地域との連携を強化する。	学校運営協議会を通じて、災害時における避難所運営について、関係機関や自治協議会等と連携した計画を作成する。	B	学校運営協議会は、盲学校・熊本聾学校と協同で2回実施することができたが、避難所運営に関する計画の作成には至らなかった。ただ、関係機関や自治協議会等との関係については維持できており、今後連携を進めていく素地はできている。	
	地域との連携	校区防災連絡会との連携	学校運営協議会と校区防災連絡会との連携を強化し、地域からの信頼と相互理解に基づく関係を構築する。	校区防災連絡会と連携し、地域の防災訓練等に参加する。	C	校区防災連絡会の体制づくりが遅れたこともあり、適切な連携を取ることができず、地域の防災訓練等への積極的な参加には至らなかった。防災型コミュニティ・スクール指定は今年度限りということもあり、連携の在り方については計画の再構築が必要である。	
理数科・美術科の充実	理数科の充実	科学的に探究する能力と創造力の育成	学校設定科目スーパーサイエンスを中心に3力年を通した探究活動の深化と充実を目指す。	スーパーサイエンスの授業や科学系部活動で積極的に研究活動に取り組ませる。校内外問わず多くの発表会に参加させ、研究内容を発表する機会を増やす。3年次には英語によるポスター発表を行う。	B	スーパーサイエンスでは1年次、2年次と2回の課題研究を経験し、科学系部活動での研究に取り組む者も増加している。県内スーパースクール指定校との合同発表会、各種学会等への参加など生徒は複数回の研究発表を経験できた。3年生は英語による研究のまとめと発表を行った。	
	美術科の充実	美術を愛好する精神とキャリアにつながる実技力の向上	実技力の向上をはかり、公募展に出品する生徒を増やす。校外のボランティア活動や、日頃の制作活動から生徒一人一人の特性や良さを見つけた進路指導に繋げる。	3年間の美術科行事とカリキュラムを精選し、生徒が意欲的に取り組めるよう3年間の学校生活作りをする。多様な視点から生徒の良さを見つけ美術科職員全体で生徒の情報を共有し、生徒や保護者の思いを大切にした指導を行う。	A	数多くの公募展で最高賞をいただいた。生徒の校外での活躍が新聞等に何度も取り上げられた1年だった。美術科の行事とカリキュラムを精選し、生徒が意欲的になる取組の流れをつくることができた。美術科の活動と、SSHの取組や講演会及び校外ボランティア活動が上手くリンクして教育効果が高まるよう工夫する必要性を感じた。	